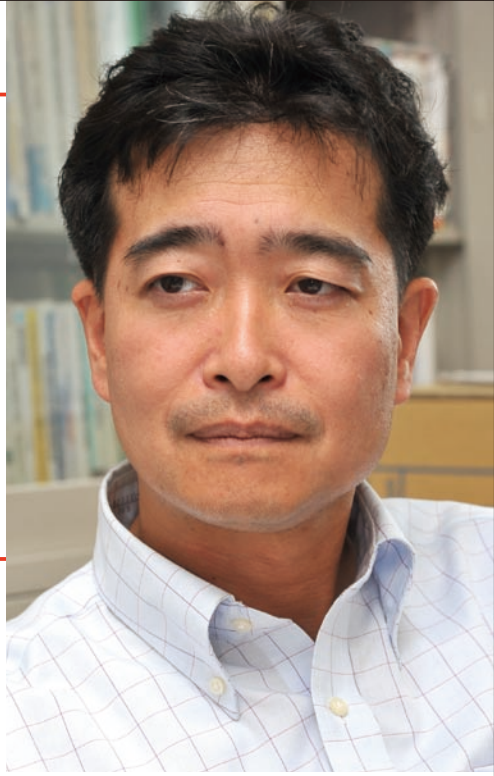
Navigator

理工学部都市環境学科／都市システム研究室
都市・地域計画

谷下 雅義教授



【プロフィール】 谷下 雅義（たにした まさよし）▷1967年、石川県生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業、同大大学院工学研究科博士課程中途退学。東京大学工学部助手、1997年、中央大学専任講師、同大学理工学部助教授を経て、2008年より中央大学理工学部教授。著書に『自動車の技術革新と経済厚生―企業戦略と公共政策の効果分析』（白桃書房、共著）、『東京のインフラストラクチャー』（技報堂出版・共著）、『新首都・多極分散論』（有斐閣・共著）など。主な研究業績は「社会資本とまちづくり協議会」「自動車関連税制の変更による燃料消費量削減効果の推計手法の開発」など。日本計画行政学会論文賞受賞。土木学会、日本都市計画学会、日本不動産学会所属。

少子高齢化時代のまちづくり、新たな価値観の提示を目指して都市と地方を探索する

土木工学から研究者人生をスタートさせ、ある時「なぜここに道路が必要なのか？」という疑問を持ったことから「土木計画」という分野にテーマを転換。そして都市計画、まちづくりやインフラ整備における制度設計などを追究してきた谷下先生。「これまでの都市計画は、人口増を前提としてきました。地方から都市にどんどん人が流入してきて、住宅の確保や交通混雑などの問題をどう解決するか、といったことが大きなテーマだったのです。しかし、日本は少子高齢化時代に突入し、今後は全国的に人口が減少、東京圏でも2015年ごろには人口減に転じると予測されています※」“人が減る”これからの時代のまちづくりを、谷下先生は見つめています。

※東京圏…東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県。出典：『10年後の東京～東京が変わる～』（2006年、東京都）

転換期を迎えたまちづくり。キーワードは「維持管理」

「人口の減少を見据えたまちづくり」を経験するのは世界でも日本が初めてだと谷下先生は言います。「日本における都市計画は、従来は欧米を追随していればよかった。しかし、欧米では今でも、人口減を前提とした都市計画を行っていません。『少子高齢化時代に即したまちづくり』という前例のないテーマに、世界で初めて日本が向き合おうとしています」

そしてこれからの時代におけるまちづくりは、「つくる」のではなく「維持管理」を重視する視点がカギになると谷下先生は考察しています。「今あるものをいかに有効に活用するか。昼間しか利用していないインフラを夜間も使用する、平日しか開いていない施設を休日も開放するといった、新しい使い方を模索していく。そのためには、利用者やその場所をよく知る地域の人の存在が不可欠になります。これまでのまちづくりは行政主導のトップダウン型でしたが、維持管理をうまく行うためには住民の声を制度に反映するボトムアップの仕組みが必要です。しかし残念ながら、ボトムアップ型の仕組みは日本においてまだ十分確立していません」

◀一時は毎月4万円分の本を購入し、読んでいたという谷下先生。現在も研究室には幅広い分野の本が積み重ねられている。

まちづくりの研究者として行政と住民をつなぐ役割を担う

現在もさまざまなまちづくりに立ち会う谷下先生は、行政と住民をつなぐ存在が必要、という思いを強めているそうです。「従来は、知識や技術について行政と住民の間には圧倒的な力量差があり、行政に任せればよいという風潮があったし実際のところ住民には権限もありませんでした。しかし現在は国民の知的レベルも向上し、その地域に長く生活している人たちの方が住みやすさを高めるスキルを持っている場合もあります。道路や堤防などの土木構造物は一度整備されれば何十年と存在し続ける、地域への影響が大きなものですから、その計画に際し住民の意思やアイディアを活用することが、これからのまちづくりには欠かせないのです」しかし谷下先生は、ただ住民の声を聞けばいいというものでもない、と言います。「住民の方々は都市計画の専門家ではないので、狭域的・短期的な視点になりがちな傾向があります。行政が持つ、経済や周辺地域、生態系への影響なども含めた総合的・長期的な視点が重要なことに変わりはありません」まちづくりの理想的な進め方は、住民が望むカタチを提案し、行政がそれを踏まえて都市計画を練り上げていくこと。その仕組みを実現するために、都市計画の研究者としてまちづくりに関する知識を住民に提供し、行政との懸け橋ともなる存在になりたいと谷下先生は語ります。「他ではこんな取り組みがある、将来的にはこのほうが良いのでは、という外部の視点、第三者の意見で当事者の視野が広がる。その役割を担うことで暮らしやすいまちづくりをサポートしていきたい。そしてこうした前例を重ねることで、新たなまちづくりの仕組みの構築につなげたいと考えています」

これからのまちづくりへの大きなヒントを秘める「地方」

一方で谷下先生は、農山村も含めた地方に深い関心を寄せています。「都市の問題を解決するヒントが地方にあるのではないかと感じるのです。人口が減少し大幅な経済成長が期待できない中で、都市では精神的な豊かさを見出しづらくなっています。新たな価値、お金では測れない幸せをどうやって提示していくか考えた時、自分の出身地でもある地方の存在に思い当たったのです」都市圏ほどの収入はないけれど、時間に追われず、住民同士のつながりを持って心豊かに生活している人が地方にはたくさんいる。もちろん地方には都市以上に深刻な人口減少問題があります。これまで切り離して考えられてきた都市と地方の問題を同時に見つめることで新たな視点が開けると、谷下先生は日本各地を訪れながら模索を続けています。

そんな中、東日本大震災が発生。谷下先生は現在、東北沿岸部地域に足を運び、そのまちづくりについて積極的な提言を行っています。「この地域の歴史と文化を調査すると、中世の城跡は津波で被災したエリアから外れているなど、興味深い発見がいくつもありました。この地域には古代から津波とつき合ってきた歴史があり、災害から命を守るための先人の知恵が数多く眠っているのです。例えば、岩手県の陸前高田市広田町では、明治や昭和の三陸地震を受け、祈念碑が７つの集落で残っており、ここより低いところに家を建ててはいけないといった言葉が刻んでありました。しかし、その後先人の教訓がおざなりにされ、祈念碑より低いところに家を建てていた集落では残念ながら東日本大震災による死者も出ています」

沿岸地域では復興の基盤となるまちづくりが行なわれようとしており、防潮堤の整備や区画整理事業などに関する議論が進められています。谷下先生は被災地域のまちづくりについて、災害への備えのために歴史資産を活かすとともに、人口が減少するこれからの時代を見据えたものにしなければならない、と説きます。「漁業などの産業、景観など地域固有の財産を活かし、全国から多くの人が訪れるまちを創造すれば、地域の人々の暮らしは成り立ちます。そのためには、防潮堤の構造を含めてどんなまちづくりを行うべきか。住民が高いところに住まいを持ち、被災エリアから外れたところにまちや集落の中枢機能を置けば、高い防潮堤を整備する必要はなくなります。海に面した景観を活かせる高さにして緑道などを整備すれば観光資源を生み出せるし、漁業者も海にアクセスしやすくなるでしょう」長期的なスケールで過去、そして未来を見据えながらまちづくりを考える。ここでも谷下先生は外部の視点で地域にとって望ましいまちづくりの姿を考え、行政や住民への働きかけを行っています。

▲「小さなまちづくり」に向けたエネルギー利用の研究に取り組む学生。研究室所属の学生はこのほか、東日本大震災における沿岸地域の被害状況や、緑道の生化学的効果などについて研究。

行動力と感性が、研究の面白さを深める

▲研究室の合宿は農村地域で行われる。写真は、昨年の合宿の際に学生が地域を撮影し、それを編集して制作した本。

幅広く自由な視点でまちづくりのこれからを探求する谷下先生。学生の指導はどのように行っているのかをお聞きすると、まずは「研究の型」を身につけてもらう、との答えが返ってきました。「ある疑問に対し、最初に自分なりの仮説を立て、それが正しいかそうではないのかを現地調査や資料、データ解析を通じて検証する。その一連の作業から次の疑問が生まれることでしょう。するとまた仮説を立て、調査や解析を行って検証します。これが『研究の型』です」研究室の卒業生は、企業はもちろん行政に就職する人も多いとのこと。どの分野に進んでも、この「型」は仕事をする上で支えになる、と谷下先生は言います。

「そして、都市や地域づくりに本気で取り組むならば、経済や法律、不動産に至るまで、幅広い分野の知識を得る姿勢が必要です。とはいえ、すべてを把握することは不可能。解決策は、自分が欲しい知識を持つ人と友達になって力を貸してもらうことです」けれどそのためには共通の言葉を持たなければいけない、だから最低限の知識は養っておきたい、と谷下先生は続けます。「積極的に本を読みなさい、と学生に言っています。今はスマートフォンなどを眺めているとあっという間に時間が過ぎてしまうけれど、時にはそうした刺激を断ち切って、集中して本を読むなど自分の力を高める時間を意識的に持つ。それが大切だと思います」

まちづくりに携わる醍醐味は地域の面白い人に出会うこと、そしてその人と腹を割って話をすることにより、自分自身が変わること、と谷下先生は笑います。「出会いから自分を刺激する何かを感じる、そして動く。その感性と行動力を持つと、面白いことがたくさんある。それを学生に体感してほしいですね」

Message ～受験生に向けて～

いろいろなことに好奇心を持ってほしいと思っています。そして机上で知識を得るだけではなく、現場に足を運ぶことにこだわってほしい。本学科も現在、学生がフィールドに出て、現場で調査を行う機会を積極的に設けています。そして現場では、小さなことでも自分なりの「気づき」を大切にしてください。そこから疑問がふくらんで、やがてはそれを追究し、解明できる「研究力」、社会で求められる力の体得につながるでしょう。